

## 《通販よもやまばなし》

### 第4話 江戸にあった「十七屋」ってナニ？

第3話で江戸時代にも「通販」があったという話をしましたが、話のついでに、関連するトリビア的な知識をいくつかご紹介しましょう。

前話で取り上げた「四ツ目屋」ですが、店のあった場所は「江戸・両国米沢町二丁目」となっています。現在の住所表示だと「東京・中央区東日本橋二丁目」にあたります。こう言うと「両国がなぜ東日本橋なの？」と思われるかも知れません。実は昔、といってもあまり古い話ではなく、第二次大戦前まで、「両国」といえば隅田川に架かる両国橋の日本橋側を指し、両国駅や両国国技館、江戸東京博物館のある一帯は「東両国」または「向う両国」と呼んだのです。四ツ目屋があった、まさに「東日本橋二丁目」に、現在、ある通販会社（グループ）が、活発に商売を展開しています。江戸の四ツ目屋とはまったく関係はないものの、グループ会社の中には、ある種四ツ目屋の商品と共通するコンセプトの商品を扱っているところもあり、不思議な巡り合わせと思わざるをえません。

わが国で、江戸時代にすでに「通販」が成り立った背景には、次の二つの理由が考えられます。一つは、世界に類を見ない高い「識字率」と「出版文化」。いま一つは、通信手段がそれなりに整っていたことでしょう。それも、当時の西欧諸国と異なり、限られた上層階級でなく、一般庶民が町人文化を享受していたことによると思われます。

識字率は、子供に読み書きを教える手習所（関西では寺子屋という）が1600年代後期の元禄から広まり、1700年代前期の享保には、早くも江戸だけでも800を数え、さらに増え続けたこともあって、幕末までには江戸市街地で男女とも90%以上、近郊農村部を入れても70%以上、全国で50%近くに達しました。同じころのロンドンの庶民で字が読める割合が10%未満、20世紀に入ってもモスクワの就学率が20%程度だったとされていますので、日本人の識字率は抜きん出た高さでした。したがって庶民の読書欲も旺盛で、貸本屋は大繁盛、各種の旅行ガイド、ショッピングガイド、レシピ本などももてはやされました。こうした中で、四ツ目屋の「通販」も商売として成立したのです。

一方、通信や物流の面では、東海道を行き来する飛脚便に加え、江戸などの大都市では、市内専門の町飛脚（江戸では「便り屋」）が鈴をつけた籠をかついで歩き、町人は声をかけて手紙や小さな荷物を頼んだようです。また、急な要件には「町小使い」を頼んだといいます。「十七屋」という屋号の飛脚業者がありました。なぜ十七屋かというと、「十五夜」が望月（もちづき）、「十六夜」をいざよいの月と呼ぶのに対して、「十七夜」は月の出がやや遅いので、立って待つから「立待月（たちまちづき）」と呼ばれました。つまり、手紙や荷物が「たちまち着く」に掛けたというわけです。江戸人ならではの洒落っ気が、こんなことからもうかがえます。